

---

**全てが変わってもお前が愛おしい。**

黒淵 めかね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

全てが変わってもお前が愛おしい。

### 【Nコード】

N9853U

### 【作者名】

黒淵 めかね

### 【あらすじ】

とある王国の王と王妃。二人はとても深い愛と絆で結ばれていた。そして死が二人を分かるとき、王妃を失った王は壊れてしまった。それからも永遠と続く転生という名の地獄。精神的に酷く衰弱した彼らはやがて探し求めていた王妃の魂を持つ者を見つける。しかし……？「やめてわたしは王妃じゃない。そのはずなのに、……この気持ちはわたしのもの？それとも彼女のもの？……お願い。【わたし】を見て。」

## 白い花弁が一枚

先の見えない真っ白な空間。

そこに一人の男が居た。

男の名前はない。

ただ自分の上司からは、【スメロテ世界管理者】と呼ばれている。

スメロテは170センチほどの身の丈を、スッポリと覆ってしまうローブを着ていた。

長ったらしい漆黒のローブは真っ白な空間によく映える。

スメロテはキラキラと白銀色に輝く長い長い杖を自分の肩に寄りかからせて、胡坐をかいて座っていた。

ふと、スメロテはあくびをする。

ふわぁあ、と大きく口を開け、垂れ目の端が湿る。

ローブの端から僅かに飛び出る白銀色の猫っ毛が柔らかく揺れた。

スメロテは退屈していた。

数多くの世界を管理しているが最近ほとんど仕事が無い。

各世界の四季を調整する大仕事が終わったからだ。

まったくこの仕事は忙しさの波が激しい。と、スメロテは思う。

忙しいときはいくら神に近い身体をもつてしても、這って力を振り絞らないといけないくらい忙しいのに……

全てを包みこむような優しい笑顔で、鬼畜な無理難題を押し付ける上司の顔を思い浮かべ、スメロテは背筋を寒くさせた。

——そのとき。

「…ん？」

スーッと薄紫色の瞳が細まる。

自分が管理する、とある世界の小さな違和感。

その違和感は本当に小さくて小さくて、今のようないない状態じゃなかったら気づきもしなかっただろう。

今にも消えてしまいそうなその存在は、か細く小さく世界の狭間に漂っているらしい。

「おいで」

このままだと世界に溶け込んでしまいそうなほどか弱い存在を、スメロテは自らの念で優しくそっと包みこみ、壊れてしまわないように注意しながらゆっくりとその存在をスメロテがいる真っ白な空間に転送させた。

薄紫色のスメロテの念で保護されたその存在は、苦しそうにチカチカと淡い光を点滅させている。

スメロテはそっと優しく自分の両手に乗せ、正体を確かめるために存在を覗き込む。

「おやおや、これは…いや、キミは…」

球状にスメロテの念で包まれたその存在は小さくてわかりにくいけど、どうやら魂のようだ。

「珍しいねえ。キミはまだ生きているのに、ここまで魂を損傷させ

るなんて」

劣わるようにそつと撫でながら、消えてしまわないように念で癒す。普通、ここまで魂が損傷することは無い。

こんなにも損傷した理由があるとすれば、魔術等の対価に魂という器が耐え切れなかったなどという理由くらいだ。

しかし、この魂が漂っていたのは科学が発達した世界で魔術は一切無いはずだ。

「…しかも、……どうしてそんなに悲しんでいるんだい？」

魂に触れたときから流れ込んできた悲哀の感情。

ただの魂では思うことなど無いような、深く暗い悲しみの悲鳴。

その思いの強さは、さっきまで消えてしまいそうだった様子からは想像できないくらい強くて激しい。

「覗かせておくれ」

優しいスメロテの声に呼応するように2、3回チカチカと点滅した魂から眩しくて激しいくらいに強い光が飛び出てスメロテを包み込む。

スメロテの影ができた途端に薄く伸び、掻き消えた。

そしてそのまま黄金色の光は白き世界を照らしこんだ。



## 薄桃の花弁が二枚

『特別な力なんて持ってない。

だけど、貴方を守ることはできる。

貴方を愛し続けることはできる。

貴方と幸せをつくっていくことはできる。

だけど、貴方がいないと本当に俺は何も無いただの男だ。

だからお願いです。

どうか俺に、貴方という力の源をください。

貴方という生涯大切な存在を、どうかこの俺に……』

ぱたりと手にしていた本を閉じる。ほんの少し勢いがあつたせいか、ふわりと香ってきた紙の匂いを感じると共に肩ほどある自分の真っ黒な髪が揺れた。

先程まで読んでいた本のタイトルは『貴方を愛す』：その名の通り、純愛が本になったようなベタな恋愛小説だ。洋風異世界の町娘と王国騎士とのラブストーリーで今一番人気な小説なのだと、この本を押し付けてすたこらと逃げていった友人が語っていた。

——まあ、ひまつぶしにはちょうどよかったかな。

閉じた本を机の横にぶら下がっている紺色のカバンに放り込む。  
もはや放課後の教室にはわたし一人しかない。

「お！すまねえな安藤。放課後まで残ってもらってしまって」  
「いえ。お気になさらず」

タイミングよくガラリと教室に入ってきたあまり反省の色が見えない先生に、椅子から腰を上げる。

——愛なんて、こんなに綺麗なモノじゃない



「失礼します」

ノックをするが反応が無かったため、一応一言かけてから保健室に入る。

…よかった。保険医の春風<sup>はるかぜ</sup> 刃先生<sup>やいば</sup>はいないようだ。

あの先生は確かに良いヒトらしいが、遠くから見てもいつも女の子に囲まれている。

外見・性格・家柄すべてよし。という完璧人間がモテないはずがないが、あの女の子集団のまん前で話しかけるなんて面倒なことはしたくない。

第一、あの保険医にはよっぽどのけが人で無い限りファンクラブしか近づいてはいけないという馬鹿らしい規則のせいで話すどころか近づくことさえ出来ない。

面倒なことだ、…だけど、彼女達は真剣に恋をしている。ということとはわかる。

ここはいわゆる、お嬢様・お坊ちゃんが集まる金持ち学校。この学び舎からであれば到底自由な恋愛などできないだろう。だからこの一時だけでも…と思った結果が親衛隊<sup>ファンクラブ</sup>なのだろう。

しかも此処にはあの春風先生以外にも、同じくトップクラスの美男・美女が生徒会にいる。

噂によると、一番人気は生徒会長の黒峰<sup>くろみね</sup> 瑠架<sup>るか</sup>らしい。

—ん…？この香りは……

白いデスクに預かった書類を置いて帰ろうとしたとき、フワリと鼻腔をくすぐる甘くて上品な香りに思わず立ち止まる。匂いの元は、

少しだけあいた窓ガラスの脇においてある高そうな花瓶の主。

引き寄せられるように、その紅に<sup>あか</sup>近づく。

そつと手を伸ばすと、薄い花卉から絹のように滑る手触りがした。

綺麗な、見事な、美しい、大輪の、真っ赤な、

「薔薇……」

ああ、綺麗。

あの全国の乙女が読んできやあきやあ騒いでるあの一冊の本より、この白い寝城にたたずむこの一輪のほうがはるかに、価値があると思う。

顔を近づけ、胸いっぱいにその香りを吸い込み、そつと目を閉じて匂いを感じる。

——何故か、なつかしい気持ちになった。

「……失礼しました」  
帰ろう。この部屋の主が帰ってくる前に。

ドアを閉めて長い渡り廊下を歩く。  
脳内を占めるのは、あの、強烈な紅<sup>あか</sup>だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9853u/>

---

全てが変わってもお前が愛おしい。

2011年9月23日13時22分発行